

カドミウム低吸収米のような新しい技術の恩恵が社会に届くためには
For the benefits of new technologies such as low-cadmium rice to reach society

食のコミュニケーション円卓会議^{*1}

○市川まりこ

(ICHIKAWA, Mariko)

1. はじめに

食の安全・安心は誰もが望んでいることです。どこまで安全と安心を求めていくかは、その時代背景や、その時々にかかわる大勢の人々の考えによって様々な答えがあるのかもしれませんが。私たち食のコミュニケーション円卓会議は、消費者の利益を損ねている障害を取り払い、誰もがより良い食生活を送れるようになることを願って活動しています。

このパネル討論では、イオンビーム育種という新技術で生まれたカドミウム低吸収米「コシヒカリ環1号」とその後代品種である「あきたこまち R」について、育種、射線の専門家、ジャーナリスト、生協関係者も加わって様々な立場からの解説を聞くとともに、その恩恵を社会で受け取るにはどうすればよりよいのか、参加者の皆さんと一緒に考えたいと思います。

2. 品種改良の必要性と新品種の誕生

そもそも様々な農作物はどうやって生まれてきたのか？ 今なぜ、カドミウム低吸収性のイネが求められているのか？ 品種改良のために遺伝子に変異を起こすとはどういうことか？ イオンビーム照射による変異誘発はふつうの放射線や紫外線、化学薬剤による変異誘発とどこが違うのか、どんな点で優れているのか？ そしてどのようにして変異体を選抜し、その子孫の中から目的に合った優れた品種を育成していくのか？ 2008年にJAEA（現 QST）高崎量子応用研究所でコシヒカリの種子にイオンビームを照射してから10年以上の歳月をかけて、具体的にどのようなプロセスを経て、「あきたこまち R」への切り替えにこぎつけたのか？ あまり報道されることのない、学校でも習ったことがない、イオンビーム育種という日本で生まれた新技術と作物の品種改良の舞台裏について専門家にお伺いします。

3. 「コシヒカリ環1号」の誕生と「あきたこまち R」への反対運動

お米に含まれる有害なカドミウムと無機ヒ素を同時に低減するために、新品種「コシヒカリ環1号」が開発され、まもなくその性質を受け継いだ「あきたこまち R」が全国に先駆けて秋田県に登場します。その他にも各地の様々な優良品種にカドミウム低吸収性の特性を与えた新品種が開発中です。これらのカドミウム低吸収米が全国に普及することで、日本人のカドミウムと無機ヒ素の摂取量の大幅な低減が期待されるだけでなく、日本より厳しい基準値を定めているEUや香港、シンガポールなどの海外への日本のお米の販路拡大も期待されています。ところが、昨年春から「放射線」への不安を煽るネガティブキャンペーンが始まり、SNSなどで誤情報が拡散され、農家への誹謗中傷まで起きていると報道されています。メディアは、「あきたこまち R」についてどのように伝えたのか、消費者に一番近い生協はどのような対応をしているのか、お伺いします。

4. 意義の共有

カドミウム低吸収米のような新しい技術の恩恵が社会に届くためにはどうすれば良いのか、まずはその技術の意義を共有することからスタートです。私たちひとり一人が、誤情報に振り回されたり、うのみにして不安や誤解をまわりに広げてしまわないことがとても重要です。

^{*1} Roundtable for Food Communication